

第3章 南阿蘇村の歴史文化の特性

南阿蘇村は、北側に中央火口丘群、南側に外輪山を有し、東から西に白川が横断して流れています。このように山々に囲まれるように平野部が広がるなどの自然的・地理的特徴に大きく影響を受けながら、本村では特色ある歴史文化が生まれ、数多くの文化財が現在まで受け継がれています。

以下、村内の歴史文化を5つに分けて整理します。

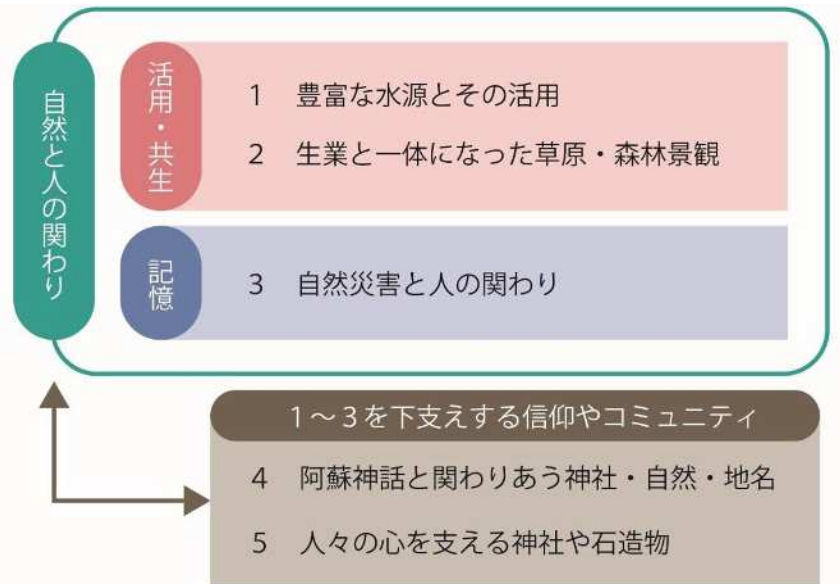


図3-1 歴史文化の特性関係図

1 豊富な水源とその活用

<概要>

南阿蘇村は「水の生まれる郷」として知られ、白川水源など計11か所の水源があります。これらの水源は歴史や景観を形成し、灌がい用水や簡易水道として現在の暮らしに密接に関わっています。また、片山嘉左衛門が開削した疏水群は、農業を支える重要なインフラとして機能しています。

<本文>

南阿蘇村は、「水の生まれる郷」と呼ばれ、白川水源をはじめ日本名水百選や平成の名水百選に選ばれた計11か所の水源を有しています。水源はそれぞれに特色ある歴史や景観を形成しており、灌がい用水や簡易水道など現在の暮らしとも密接にかかわっています。また、平坦地が少ない南郷谷において、水田の開発のために片山嘉左衛門（松翁）が開削した保木下井手をはじめとする6つの疏水群は、地域住民が維持管理を行いながら村の農業を支える重要なインフラとして機能しています。片山嘉左衛門（松翁）の偉業を伝える顕彰碑が、久木野地区に建立されています。



図3-2 白川水源

2 生業と一体になった草原・森林景観

<概要>

火山性土壌である南阿蘇村では土壌の養分が不足しており、耕作に利用する肥料（草肥）作りや田畑を耕す労働力としての牛馬を飼育するための草原があります。現在でも草原を野焼するなどの活動により、昔からの草原景観が守られています。

<本文>

南阿蘇村は、阿蘇カルデラ南部の南郷谷に位置し、湧水が豊富です。しかし一方で、火山性の地質であるため土地が痩せており、土地を耕作地として利用するためには草地や放牧地の緑肥を利用して肥料を作り、土地を一体的に利用することが必要でした。そういった地質的な条件から、耕地や集落、里山、草原などが垂直的につながる土地利用構造が生まれ、生業と一体となった草原・森林景観を形成しています。

草原は、日本書紀（720年）に「野は広く人家なし」とあり、そのころ既に広い草原があったことが示されています。草原は、低地の集落が野焼き、採草、放牧といった行為を行うことによって長年維持されており、冬季の貯蔵飼料とするための草小積みや、害虫駆除や土地の保水力の維持など多面的な機能を果たす野焼きは季節ごとの風物詩となっています。



図 3-3 野焼きの様子（白川牧野）

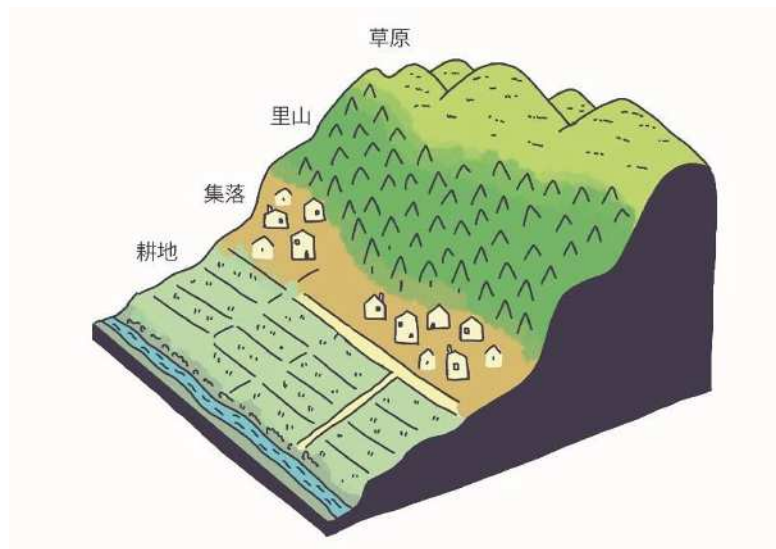


図 3-4 垂直的につながる土地利用概念図

3 自然災害と人々の関わり

<概要>

阿蘇山の噴火は村の歴史に多大な影響を与え、長陽地区の水蒸気爆発を含め、生活に影響を及ぼしています。南阿蘇村に住んでいた人々は記念碑を建てることなどにより、それらの自然災害の痕跡や記憶を後世に継承しています。

<本文>

村の北側に位置する中央火口丘群の中で、有史以降、最も古い噴火は中岳火口（阿蘇市）の欽明天皇 14 年(553 年)です。長陽地区の烏帽子岳の中腹にある湯ノ谷温泉では、文化 13 年(1816 年)に小規模な水蒸気爆発が起こっており、当時の様子は絵図として残されています。このほかにも、村内最古の遺跡である河陽 F 遺跡には岩屑なだれの痕跡が残されており、村内の各地で過去の噴火の歴史を見ることができます。直近では令和 3 年(2021 年)に噴火がありました。噴火は現在においても、農作物の被害や健康被害など生活に多様な影響をもたらしています。

また、阿蘇カルデラで唯一の切れ目である立野火口瀬付近には、活断層が存在することから、カルデラ湖の形成と断層運動による湖の消失を繰り返してきたと考えられています。ここには「健甞龍命の蹴破り伝説」があり、数鹿流ヶ滝の名称はその神話に由来するものであることなど、自然災害と先人の関わりが伺えます。平成 28 年(2016 年)の熊本地震は村内に甚大な被害をもたらしましたが、被災建造物や地表地震断層などの災害遺構の一部が保存され、後世へ伝承する取組が行われています。

加えて、昭和 28 年(1953 年)に起きた 6・26 水害では、死者・行方不明者 65 人、家屋被害 387 戸という甚大な被害を受けており、村内各地に記念碑が残されており、災害の記憶を現在に伝えています。



図 3-5 中岳中央火口丘（火口）

阿蘇火山博物館より提供



図 3-6 水害記念碑（加勢区）

4 阿蘇神話と関わりあう神社・自然・地名

<概要>

阿蘇神話には、健甞龍命と阿蘇都姫命が登場し、夜峰伝説や健甞龍命が外輪山を蹴破った神話があります。南阿蘇村には、その神話に関連する神社や自然、地名が多く残っています。また、これらの神話にまつわる巨石や伝説に登場する場所や言い伝えのある場所も数多く存在します。

<本文>

久木野宮神社は、健甞龍命・阿蘇都姫命を祭神とし、久木野の地名発祥の地とされています。これは、長陽地区における夜峰伝説で、阿蘇都姫命が妊娠した際、お産の姿を隠すために一夜で築いたのが「夜峰山」で、夜峰山が崩れないよう釘を打ったのが現在の久木野宮であるという神話に基づくものです。他にも現在の「立野」の地名が、健甞龍命が外輪山を蹴破った際に尻餅をつき「立てぬ」と言ったことに由来するという神話や、江戸時代に編さんされた肥後国誌に「白川乾藪堂というところに、阿蘇大御神の御足跡石がある」と記されている白水地区の巨石（阿蘇大御神足跡石）など、南阿蘇村の各地に、こうした阿蘇神話との関わりが認められる場所が多く残されています。



図 3-7 夜峰山



図 3-8 阿蘇大御神足跡公園（白川区）

5 人々の心を支える神社や石造物

<概要>

神社や石造物は、コミュニティの中心として夏祭りや秋祭りなどを通じて地域住民を支えています。石造物は信仰の対象や歴史の証であり、熊本地震後も地域住民により修復され、心の拠り所として重要な役割を担い続けています。これらの文化財は、地域の絆を深め、人々の心に影響を与えています。

<本文>

神社は、現在もコミュニティの維持に重要な役割を果たしています。夏祭りや秋祭りなどの催しを地域住民主体で続けている神社が多く、高齢化や担い手不足の問題に直面しながらも、開催日を変更するなどの工夫をしながら綿々と受け継がれています。

また、石造物は、地蔵尊像をはじめ様々な石仏が各地にあり人々の信仰を集めているほか、馬頭観音、猿田彦大神や甲斐有雄の道しるべなど、交通に関わる石造物が建造されており、かつて村を行きかかった人々の歴史を感じることができます。加えて、井手の開削・災害の発生・圃場整備などを伝える記念碑や、過去の偉人を称える顕彰碑も多く残されており、産業の発展や災害の歴史とともに教訓や報徳に導く大切な情報を今に伝えています。

熊本地震によって破損した石造物も多くありますが、地域住民によって修復・再建されるなど、現在も人々の心の拠り所として、またコミュニティの場として重要な役割を持っています。



図 3-9 卯添阿蘇神社夏祭り（喜多区）



図 3-10 猿田彦大神（吉田区）